
イレギュラーな魔術師

常高院於初

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレギュラーな魔術師

【NNコード】

N1356S

【作者名】

常高院於初

【あらすじ】

エリート魔術師の一家の落ちこぼれの次男坊で、家族に捨てられて親戚に引き取られ、魔術師として大成し、故郷のエリート魔術師を養成する高校の『落第した落ちこぼれが集まる』といわれる普通科に編入した、星野浩明による巻き込まれ系魔法バトル物です。自身初のオリジナル一次創作ものですので温かい目で見ていただけると嬉しいです。

プロローグ1（前書き）

自身初のオリジナルです。
今までのギャグ物ではなく、新しいジャンルの挑戦です！

プロローグ1

午前零時を過ぎた人気が全くない繁華街、その一歩はずれた地方銀行の裏口でこそこそと動く男の影があつた。

サングラスをかけて帽子を深くかつて顔を隠し、全身黒ずくめで大きめのショルダーバッグを抱えたその姿は彼が銀行の関係者ではなく強盗目的だと分かつた。

「暗証番号は……つと」

男がボタンを押し終えると機械的な音がロックの解除を知らせた。調査済みとはいえ、あまりにもお粗末なセキュリティーに男は半ば呆れながらなかに侵入した。

「金庫は……」

暗闇のなか、片手に持つた懐中電灯を片手につきあたりの金庫室に移動し、次の解除作業に移るために金庫の扉の前にしゃがみこんだ。

「ここからが本番だ。」

気合いを入れ直して金庫に向かうと扉に耳をあて、ダイヤルに手をかけてまわし始めた。

暗闇のなか、わずかな音の違いを聞き分けていく。

「これで……よしつと」

重い金属音の音と共に開いていく扉に軽い達成感を得たその時だつた。

暗闇に包まれた室内に、明かりが灯された。

「な、何だ！？」

突然の出来事に慌てて立ち上がりあたりを見回すと

「はい、チーズ」

気の抜けたような軽い声の後に、デジカメのシャッターを切る音が室内に響いた。

人間を『トラブルを起こす側』と『トラブルに巻き込まれる側』とで分けるとしたら、この物語の主人公である星野浩明は間違いなく『巻き込まれる側』だろう。

彼はとにかくトラブルに巻き込まれ、更に人から何かを頼まれると断れない水呑み馬である。

兄に頼まれて、コンビニに買い物（ビールと大福つてどりいう組み合わせだよ）に行つた帰り道、早く帰ろうと裏道に入ると、男が銀行のセキュリティを解除して中に入るという場面に出くわしてしまい、放つておく訳にもいかず、

「くそッ」

吐き捨てるように言いながら、男が奥に行つたのを確認して中に入り、更に金庫を開けているのを確認すると、持つていたサングラス（変装用に）をかけ、証拠を押さえるためのデジカメ（たまたま持つていただけで、盗撮目的ではない）を取り出して、室内灯をつけた、

「はい、チーズ！」

室内灯がついたことに驚いて金庫の前から立ち上がつた男に向かって、浩明はデジカメのシャッターをきつた。

「参つたねえ、おつかいの帰り道にまさか銀行強盗に出くわしちゃうなんて……」

事態が分からず狐に包まれたように呆気にとられている男を前に、浩明ぼやきながらはデジカメを上着のポケットにしまつた。

「だ、誰だ！？」

「誰つて……答える必要ある？」

間抜け面をさらしていた男が、慌てて醜態を取り繕つついに威圧していくという小物つぶりを見ながら、呆れて笑みをこぼして煽るように言い返した。

「あえて言うなら……正義の味方かな？」

「ふざけんな！……」

分かりやすい奴だねえ……

虚勢を張り続ける男を更に煽るも、次に男が取つた行動に浩明の樂觀が吹き飛んだ。

「何だよ。魔術師かよ……」

余計な仕事が増えたな

浩明の顔から笑みが消え、ため息をついてから構えた。

近未来。科学技術の発展により、アニメやおどぎ話でしか出てこなかつた『魔法』という空想の產物は、科学者の研究により現実世界にもたらされる事となつた。

科学者達の長年の研究の結果、人間の体内には魔力を持つ人種が存在する事が発見され、更に訓練次第では自由に魔法が使えるようになると発表し、それにより魔法教育の発達を促す事となつた。

しかし、こうして『魔術師』と呼ばれる人間が生まれた結果、それは世界に大きな波紋を生み出した。

『ありえない事を可能にする それが魔術師であり魔法である』その定義によつてもたらされた世界は、新たな秩序を作り、多くの混乱をもたらした。

一部の魔術師は魔法による犯罪を生み、世界に新たな災いをもたらす事となつたのである。

予想通りコンバーターを装着させたら相手の表情が一変した。

「何だよ。魔術師かよ……」

どうやら相手はコンバーターを着ける様子はない。つまり、『魔術師ではない』という事になる。

勝つたな

男が笑みを浮かべて詠唱を唱え、両腕を前に構えた。浩明が構える様子もなく、ため息をもらしていた。

「馬鹿なヤツだ。力のない人間が正義を振りかざした事を後悔させてやる

男が詠唱を終えると、男の前には十本の氷の槍が構築された。

アイスニードル

氷雪系魔法の中でも比較的中位に位置する魔法で、一度に十本放てれば1人前の魔術師とされる

「どうだ、これだけの槍を見た事あるか？」

未だにため息をもらし、怯えたように見ていた男を挑発した。

「どうだ、これだけの槍を見た事あるか？」

十本の氷の槍を浩明に向け、男は浩明を見下すような下品な笑みを浮かべて言った。

「どうしようかな……

浩明は心底めんどくさそうに、しかし、楽しみまじりに男を見た。実力はだいたい分かつたが、己の手の内は晒したくはないし、何より反撃して室内を荒らすのは気がひける……。

「どうした？ びびつたか、三下？」

どう対処するか思案していると、男は浩明を更に挑発してきた。

「どん底に叩き落とすか

男の一言に、浩明はそう決めた。

「いやあ、室内を荒らさずにどうやって片付けようかと思つてね

「何だと！？ き、貴様！」

相手の油断を誘つよう煽ると、男は浩明の口論見通りに逆上し、「死ねえエエエエエエ！」

男の掛け声とともに、自分の作ったアイスニードルの一本を浩明

に向けて放つた。

「死ねえエエエエエエ！」

「これで終わりだ

浩明に対してアイスニードルを放つた。

それは、浩明に刺さつて終わり……のはずだった。

「なつ……」

男の表情が凍り付いた。相手は、自分の放つたアイスニードルを素手ではじき飛ばしたのだから。

魔術師とそうでない者との戦いは、圧倒的に魔術師に有利である。『攻撃魔法に対する反撃の方法がない』からだ。

そして、魔術師の戦い方は己のなかにある魔力を魔法として発動するためには、己の魔力をコンバーターによって変換し、口頭による詠唱によって、はじめて魔法として使うことができる。つまり、魔法の発動にはコンバーターと数十秒の時間が必要になる。

すなわち、コンバーターもつけていないただの一般人が、何のそぶりもなく魔術師の放つた魔法に対して反撃をしたのである。

「な、何なんだお前は！ いつたい何をした！？」

目の前で起こったことが信じられず、パニック寸前の男はようやく出すことのできた疑問を浩明にぶつける。

「何をつて、君の見た通りの事をしただけだよ」

「ふざけるな！ 仮に貴様が魔術師だったとしてもコンバーターも詠唱もしてないのに魔法を放つなんてありえるわけが」

浩明の言葉にまくしたたて否定しようとしたが

「『『ありえない事を可能にする それが魔術師であり魔法である』じやなかつた？』

「……」

それを、遮つて浩明が言つた言葉に、男は黙り込んだ。

なんなんだ、この男は！？

自慢の魔法を、あり得ないやり方で防御され、未だ手の内を明かさない浩明に、男の心は恐怖という感情に支配され始めていた。

「さてと……、まだやる？ アイスニードルを解除して、おとなしく引き上げるなら見逃してあげるけど

腕を組んで自分を見下すように見ていた浩明の、降伏を勧告された瞬間、

「う……うわああああああ――――！」

感情を抑えきれなくなつた男は、残つていた氷の槍を一斉に浩明に向けて放つた。

氷の槍によつてお互いの視界が遮られたのを確認してから、浩明は腕を使い、自分の前に等身大の光の壁を作り、アイスニードルを防いだ。

男の放つた氷の槍をミラーバリアーでなんなく防ぎきると、男の行動に感心した。

ミラーバリアー

指先から己の魔力を放ち、それを大気中に形成させて光のバリアを作る、浩明が得意とする防御魔法である。

「逃げたか……」

遮られていた視界が開けると、そこにはさつきまでいた男の姿がなく、代わりに壁に大きな穴が出来ていた。

相手さんも馬鹿じやないみたいだね

自分がかなわないとみるや即座に逃走するという、とつとの判断に浩明は感心すると、

「鬼ごっこしますか」

子供が無邪気に遊ぶように笑みを浮かべると、男の開けた穴から

外に出たのだった。

プロローグ1（後書き）

感想やご意見をお待ちしております

2 (前書き)

かなり、間が空いてしまいますいません。
しかも、こんな中途半端な所で投稿つて……

私立青海高校

元は普通科高校であつたが、魔術の普及が広まり始めた時（通称、魔術創世記）に、当時の理事長が、他の教育機関に先駆けて魔術師の育成を目的とした、魔術専攻科を設立し、以来、数多くの有名魔術師を輩出した名門校となつたのである。

「なんだ、あの人だかりは？」

私立青海第一高校への転校初日、校門をくぐつた私の第一声はそれだつた。

浩明の目に映つたのは、誰かに群がつてゐる新入生の集団だつた。
「宗一郎様」とか「雅様」と聞こえるところを見ると、頭腦明晰、スポーツ万能、容姿端麗、所謂学園のアイドルと呼ばれているであろう学生が団まれてゐるのが分かつた。

「まつ、私には関係ないか」

その集団をあまり気にせず、人目を避けるように校舎の中に入り職員室へと向かつた。

「君が星野君か。私が担任の橋だ。よろしくな」

持つてきた書類に目を通してから、担任の教師は橋と名乗つた。

「星野君は……普通科への編入だけど、どうしてうちの高校に來たんだい？」

「それは……どういう意味ですか？」

質問の意図が分からず聞き返した。

「いや、氣を悪くしたなら謝るよ。ただ、魔術専攻科への編入なら分かるんだけど、普通科への編入は初めてでな、君の成績なら、こじやなくても十分やつていけるんじやないかと思つてな」

「ああ…それですか」

橋の質問の意図を理解して、浩明は声を挙げた。

浩明が編入した私立青海学園は魔術師の育成に力を入れる魔術専攻科が有名で、卒業生のなかには数多くの有名な魔術師があり、入学者希望者が後を絶たない全国でもトップクラスの名門校であり、一方の普通科は「受験で失敗した学生が一次試験で受けて入ってくるという所謂『落ちこぼれの集団』」というレッテルを貼られているのである。つまり、浩明のように自ら望んで編入するような人間は珍しく、と言うかまずいないと言つても過言ではないのである。（実際に浩明が編入試験を受ける書類を提出した時に、魔術専攻科への編入ではないのかと何度も聞かれた）

「英一兄さん、いや、兄にこの高校をすすめられたんです。ここなら私のやりたい事が出来る筈だつて」

「やりたい事ねえ…」

浩明の回答に、橋は理解しかねるような表情で咳いてから

「まあ、何がしたいか知らないけど魔術専攻科の生徒と問題だけは起こすなよ」

「はい、向こうから何かしてこない限り起こしませんよ」

橋の注意に対して、起こすか起こさないかは相手次第だと釘を刺して答えた。

「お前、喰えない奴だな。とにかく、俺から言いたいのはそれだけだ。じゃ教室へ行くから付いて来い」

そう言われ、橋の後ろについて職員室をでた。

「橋先生」

「なんだ？」

「随分と目立つてますね」

「我慢しろ。本校初の普通科編入生を見たい珍しいもの見たさだ」
移動中、周囲から注がれる好奇心に満ちた視線を先にいる生徒達
を見ながら聞くと、橘は諦める事を促した。

「橘先生、注意しないんですか？」

「生徒の好奇心を止められるほど、俺は有能じやないぞ。それに……」

「そう言って浩明の方を振り向くと

「君、全く気にしてないだろ？」

「「こもつともで」

橘の言葉に、肩をすくめてから答えた。

「ども、星野浩明です。……よろしくお願ひします」

橘先生に紹介され、愛想笑いをしながら形式的な挨拶をすませると、途端に好奇の視線が向けられた。

まあ、当然といえば当然か……

ある程度、予想していたとはいえ、浩明はそんな視線をまるで気にする様子もなく無視した。

皮肉にも天統家での十一年間、軽蔑され、見下され続けた浩明にとつて好奇の視線など全く気にならないのだ。

「えっと……、星野の席だが、窓側の……」

「空いてる席つすね」

しかし、それに気付かない橘先生は、浩明を気にかけて、声をかけたが、そんな気遣いを無視するように橘先生の言葉を続けてから空いていた席についた。

「イライラした時に甘いお菓子」という考えは万国共通なのかは知らないが、浩明は「イライラした時には甘いお菓子」と決めてい

る。……もちろん、イライラしていなくても甘いものは浩明にとって大好物なのは変わりないんだが。

学校帰りの買い物に、そんな言い訳じみた理由を出して、浩明は自分を納得させることにした。

浩明がイライラを発散したくなる理由は、転校初日のクラスメイトや魔術専攻科から来た見物客にあった。

「穴が空くほど見続ける」って言葉が本当に起つたら、今の俺はスポンジ状に穴だらけになつてゐるはずだ。つまり、何が言いたいかというと「鬱陶しい」の一言に尽くるというわけだ。

授業中はチラ見程度、休み時間は動物園のパンダ扱い。転校生に対する質問タイムというお約束を期待したわけではないが、見せ物になるという展開は予想がつかなかつたよ。結局、初日はクラスメイトとあまり会話も出来ずに終わつてしまつたわけだが、まあ気にしてたら負けだな。明日からは、こちらから近付いてみよう。

「次の方、ご注文をどうぞ」

決意を新たにしていると、自分の順番が来たらしく、軽快な店員の声に、考え方をやめて、メニューに目を移した。

「え……つと、クリームに粒あんと……」

家で引っ越しの片付けをしている英二兄さん用に手みやげの分も注文して、大判焼きの入つた袋を受け取ると、店から離れた。

焼きたてというのはなんとも得難い誘惑があるものだ

紙袋のなかから未だに湯気の立つ熱々の今川焼きをひとつ取り出し、口に持つてこうとして、それが口に入る事はなかつた。

轟音と共に襲いかかってきた熱風が、浩明の右手で持つていた今川焼きと、左手で抱えていた今川焼きの入つていた紙袋を近くに出来ていた水たまりに吹き飛ばした。

2 (後書き)

感想、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1356s/>

イレギュラーな魔術師

2011年12月27日20時45分発行